

高木健太郎先生と私

東洋医学研究所® 黒野 保三

私は小学校5年生の時、野口英世の本を読んで医者になろうと思っていました。高等小学校を卒業した時、母から「お前、鍼医者にならんか」と言われました。それが鍼灸師になるきっかけでした。

昭和20(1945)年4月1日に名古屋市中区下前津にあった名古屋盲人技術学校に入学して私は2つ年下の浅村直正君、恒川俊彦君と仲良くなり、私がリーダー格となって、運鍼の技術の練磨やうさぎを使って折鍼の実験などを行いました。このことが私の人生の転機となり、今日に至っております。

昭和35(1960)年4月から8月まで岐阜県立 下呂温泉病院にて、リウマチ患者を対象に鍼治療の研究を開始し、9月帰名後、鍼治療について、鍼を体に刺すことで体を治療することができるという摩訶不思議なメカニズムを知るために名古屋大学病院の理学療法室長 宇佐美男惇先生を訪ねました。ちょうどその時、整形外科医の山下講師(のちに多治見市民病院長となる)が「鍼かね、鍼なら最近新潟大学から赴任してきた高木健太郎生理学教授が鍼に興味があるみたいだから紹介してあげよう」と言われ、高木健太郎先生の教室を訪ねました。

ところが初めて会った私に、高木先生は真剣に「学問とは何か、医学とは何か、研究とは何か」についてしっかり教えて下さいました。そこで高木先生の弟子にして頂き、高木先生の半側発汗(半側発汗とは左右いずれかの側腹を指で押すと反対側に市松模様に出る現象)の研究を、指の代わりに鍼を使って研究を始めました(高木教室には温度と湿度が適宜に変えられる人工気候室がありました)。しかし、結果は良くなく、高木先生の発汗図の再現は失敗に終わりました。

昭和47(1972)年10月に日本鍼灸学会常任理事であった私は、高木先生に実行委員長になって頂いて、日本鍼灸学会愛知地方会を発会しました。そして11月高木先生が中国を訪問された際に中国医師団の訪日を確認してこられ、翌年昭和48(1973)年4月28・29日に、名古屋豊田講堂にて、中国との国交回復後初めての中国医師団を招聘して、第20回日本鍼灸学会学術総会(総会会長:高木健太郎)が愛知地方会担当で開催されました(シンポジウム「痛みについて」、特別講演「我国の鍼麻酔の展開と概況」)。

昭和50(1975)年11月3日に高木健太郎第9・10期日本学術会議委員の要請により、日本鍼灸医学会事務局長であった私は日本学術会議、文部省の方々に鍼灸医学、鍼灸師の現状と将来についての説明のために日本学術会議室に出向き、鍼灸医学の高度教育の必要性と鍼灸師は鍼灸医師であることを提唱しました。このことが鍼灸大学設置の引き金となったのであります。

(社)全日本鍼灸学会は、昭和55(1980)年4月1日付けで文部省より法人許可を頂きましたが、日本鍼灸医学会は昭和55年4月に第30回日本鍼灸医学会学術総会が東京都一ツ橋の日本教育会館で開催し、日本鍼灸治療学会は同年10月に第30回日本鍼灸治療学会学術総会が吹田市市民会館で開催し、両学会が共に発展的改称を宣言して統合一体化しました。そして、昭和56年5月23・24日(社)全日本鍼灸学会設立総会並びに第31回学術大会が名古屋市公会堂で開催されました。

高木健太郎先生には、(社)全日本鍼灸学会になった昭和55(1980)年4月から昭和59(1984)年3月までの2期4年間会長をお勤め頂き、(社)全日本鍼灸学会の発展のためにご尽力賜りました。

高木健太郎先生が名古屋市立大学長になられてからは高木健太郎先生のご紹介で名古屋市立大学第一解剖学教室(渡仲三教授)の研究員となりました。

以後、高木健太郎先生、堀田健先生、渡仲三先生、松本美富士先生との共同研究により、鍼の治効メカニズムを解明するための基礎的、臨床的研究を種々行ってきました。

ここでは、上述の内容をかいつまんでお話しさせていただきます。